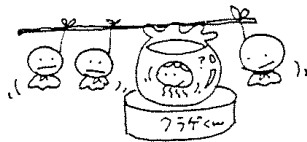
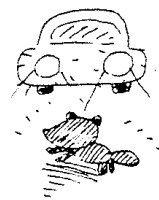


たぬき道



☆☆☆☆☆☆目次☆☆☆☆☆☆

I. 地域ニュース	朝日・日経・読売ほか
II. 狸囃子百夜 (12) (13)	加藤 輝治
III. フィールドノート欄外夢想 (7)	佐伯 緑
特集《餌付け》	
IV. しつこいようですが「餌付け問題」	岸本 真弓
V. DOG FOODは安全・完全栄養食か?	相良 順子
VI. 餌付けについて考えてみよう!!	福江 佑子
VII. 野生動物への餌付け	廣谷 聡子
VIII. 書籍紹介	福江 佑子
IX. ケンジ君のひとりごと	山本 祐治
X. LATRINE BOARD・編集便り	



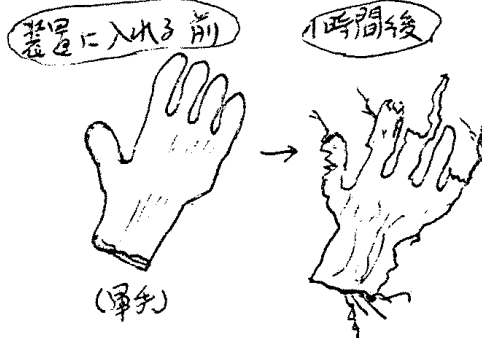
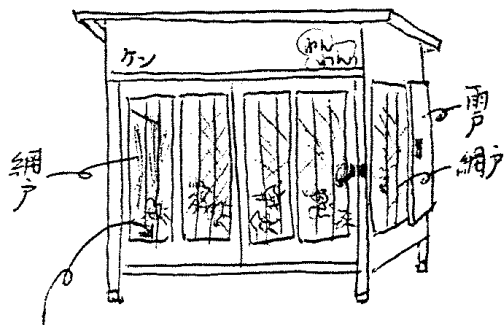
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

奇習犬が行く! ⑤「子犬時代」の巻

ケンの格言: 触らぬケに祟無し = ちよとかまうとずと遊んでやらねば行らぬ。
 不ケン実行 = おとなしい子犬と思っていると悪いことを行っている。
 鶴の目鷹の目ケの鼻 = 何かと執拗に捜す様子。

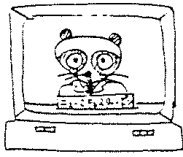


3ヶ月のケンに大小屋と与えたら、網戸は一週間で「ボロボロ」。
 以後、大小屋自体が「エントロピー加速装置」化する。



父が畳屋で作ってもらった特注の畳は2時間でワラと化する。

1995. 4. 28 (金) 日経



タヌキとの共生
テーマにシンポ

横浜市の環境保護サークル「自然に学ぶ会」は三十日、同市青葉区の国学院大学たまづら一サキャンパスで「タヌキ・サミット95」を開く。タヌキと共生できる自然環境を守らるというテーマを通じて、各地で環境保護活動をしている人たちの交流と情報交換を図る。

近年の開発で、都市近郊の緑地が減少しており、タヌキの生息環境は年々悪化している。その結果、交通事故、皮膚病などの被害が増えている。また、えさを与える人が増えたため、結果として野生タヌキが自力でえさを捕れなくなるという悪影響も出ている。

昨年に引き続き二回目。パネリスト四人が都市近郊のタヌキの生息状況を報告した後、シンポジウムを行う。

1995. 5. 22
朝日新聞

天声人語

「町だぬき」とは初めて聞く言葉だ。別にタヌキの新種ではない。すんでいた丘陵地が開発され、都市の周辺で人間と密着して生きなければならなくなったタヌキのことだ。そうな、東京都町田市の市民たちの命名による▼町田の町タヌキ。言葉遊びのようだが、実態をよく表している。町田市には緑の島のような里山があり、多摩丘陵の風情を残す。だが、近年の開発で里山のタヌキのすみかはしだいに人間の住宅地に変わった▼一九八〇年代の半ばから、タヌキの交通事故が目立ち始めた。えさを求めて家の庭先に現れるなど目撃される例も増えた。畑の作物を荒らし、人家の床下や納屋で出産する。団地の池に落ちたタヌキもいる▼町田には「多摩丘陵野外博物館」がある。市といっても建物はない。市民約二百三十人が、丘陵の自然そのものが生きた展示物である、として自然観察

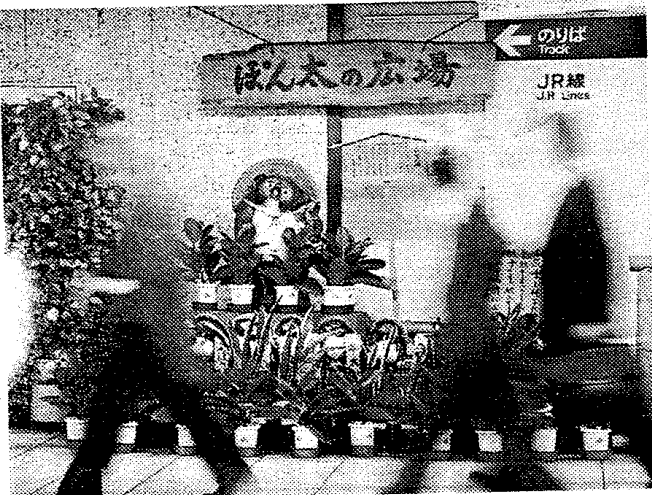
などの活動をしている。彼らの「たぬき実行委員会」が八〇年代半ばにタヌキの生息を調べ始めた▼交通事故の発生は、緑地と緑地をへだてる道路沿いが多い。多い年には六十二匹も死んだ。けもの道として道路わきの側溝を利用してはいる様子も無人カメラがとらえた▼委員会の活動は多様だ。シンポジウムを開いた。人とタヌキが共存できる町づくりを提案した。市は協力的で、雨水の流れる側溝にはタヌキ用の出入り口を、けもの道を道路が分断するところにはトンネルをつくった。その中に糞が見つかった時はうれしかった▼タヌキの絵の道路標識も立てた。昨秋、中学校では生徒たちが文化祭で町タヌキを勉強した。環境を具体的に考えることにつながった。彼らの資金も助けとなり、実行委員会は魅力的な小冊子『いまどきの町だぬき』を出版した▼委員の一人、桑原紀子さんが面白いことを言う。「自分の中にタヌキの目ができた。町や人が今までと違って見える」

クイズ
各駅停車

正解者に記念品

応募は、はがきに〒住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記、〒100-55読売新聞社広告局「ぴーぷる」クイズ各駅停車係へ。二十七日消印有効。正解者の中から抽選で三十人に「ぴーぷる」特製のテレホンカードを送ります。

地下コンコースに七年前から住みついているタヌキの「ほん太」一家は、八匹の子タヌキのうち二男の「ほん助」が行方不明、しかもサリン騒動で写真にある周りの緑が撤去され、一家の「処遇」も気遣われて



野崎 英吉氏（『室堂にタヌキ』『はくさん』第22巻 第2号）によると、石川県白山の高山帯、標高2450mの室堂で、1994年9月、タヌキの自動撮影に成功したそうです。もともと、オコジョを撮ろうとしてタヌキが写っていたということです。都会で生きているタヌキにも驚かされますが、こんな高い山でも目撃されるとは・・・。

ホテルの営繕の仕事ほどいそがしいものはない。まして、この古ホテルは皇族が泊まりにくるといふ格を誇っているだけに、築百何十年のボロ繕いにしょっちゅう動き回っていななければならない。廊下板の張り替え、階段の隅欠け箇所、庭園の太鼓橋の赤ペンキのぬり替え、錦鯉の池の泥ざらい、玉砂利歩道の小石の水洗い、駐車場周りの草刈り……と毎日が目が回るほどなのに、この上、営繕さんはリネン室の床下をいつも気にかけていなければならない。

黒白まだらのメス犬がここで子育ての最中なのだ。広大な敷地の奥まった所なので、床下のことは支配人には隠し通している。

賢そうな顔をしている黒白まだらを、営繕さんはバカじゃなかろうかと思う。自分の子五頭だけでも大変なのに、加えて子ダヌキ五頭の計十頭を養い、乳房以外はがりにやせ細ってエサ漁りにばかり出かけている。帰れば床下の平らな地面のわが子に乳をのませ、いい加減に立ち上がって、となりの石臼状に一尺ばかり凹めた巢で待つ子ダヌキの中へどたりと倒れこむ。

「死んでしまうぞ、おまえは。」そう言うのに黒白まだらは頭をなでてもらおうと目を細め尻尾をふってからよろよろと出かけていく。せめて留守に一寸でも助けてやろうと、従業員食堂でもらってくるソーセイジ、ニシン、パン、牛乳などを手に呼ぶと、いつもまだら子犬が出てくる。営繕さんの手に乗っかってでも食べる彼らに比べ、子ダヌキはたまに寄ってきて、「シャーッ」と口を開け、ツメを立てて野生をむき出しにする。えさをくわえると後じさり床下へ入っていつか食べる。両方の子の違いに営繕さんは感心して見とれているが、そのうち満腹した十頭が誰彼なしに入り乱れて組んずほぐれつをやり出すと、頭の中まで混乱するからたいていその場を離れて仕事に行く。凹んだ地面の巢までしつらえて消えたのだから親は不慮の事故に遭ったのだらう。このタヌキは循環道を越えて荒神さんの森へよくノネズ

ミを獲りにいくから車にはねられ早朝の清掃車にもついでいかれたのかもしれない。

庭園の斜面を崩したとき、大杉の幹が埋まってしまい、土管を巻いて息ぬきしてやらねばならなくなった。黒白まだらが大土管のぞきこんで立ったり座ったり、近づく営繕さんに愛想笑いをしたり。のぞきこむと土管の底に穴好き子ダヌキが五頭ともうごめいていた。一頭つまみ出すたびにまだらは首をくわえてリネン室の床下へ喜々と走った。営繕さんに、杉幹と土管のすき間のネット張りの仕事加わった。

営繕さんがサライコふり上げ追いかけ、黒白まだらが猛進したのに、大きなノネコが一頭くわえて持ち去った。不幸なその日からまだらは夜叉になった。腹をかぶられた若ネコや子ネコの死骸を営繕さんはいくつも片づけねばならなかった。営繕さんも床を踏むと針金が引っ張られ戸に刺したクギが抜け、戸の自重でバタンと閉じる仕掛で復讐を計ったが若ネコばかりが捕れた。それでも庭内の木まで枯れさす臭い尿臭がしなくなったという効果はあった。

リネン室のそばの長い石垣を越すとホテル裏の古びた町通り。黒白まだらはこの八百屋へ毎日通ってイモ、テンプラなど離乳食をもらっていたら、四頭のタヌキは大きい順に石垣の穴に巣わかれしていった。巣わかれすると自分で餌をとらねばならない。

いつの間に見ていたものか、四頭は夜になると、母ちゃんのお得意の八百屋へ通い出したが、陳列のガラス戸を開けてテンプラをとり出すのを見た八百屋のカミさんは、その夜から熱を出して寝込んでしまった。

カミさんは寝込んでしまったが、黒白まだらの子育てはぐんと楽になった。あとは自分のぐうたら息子たちを追い出すだけである。ちよっとは肉がもどってきたまだらの顔を見て、営繕さんはほっとしている。



先生らが便宜的に国準、国準と呼んでいる国女高の国語準備室には三、四人の国語科教員の机もある。生徒指導室や進路指導室へも回るから、年によって人数が違う。ここにいつもいるのは主任で比較的ひまな先生なので、そこをねらって、朝の始業前や休憩時間の、国準への闖入者が多い。

「ダブルスコアでしてんよ先生。勝ったと思う、負けたと思う？」

「そら、うちの学校や。負けに決まっとる。」

「やっ、失礼！バレーは例外で強いですんねんよ。」

「人気のない廊下に笑いを残して、主将は朝練へ走っていく。」

「親や担任は大学受けよ言いますねんけど、税関の試験受けよ思てますねんけど。」

「海のGメンでやつやな。テレビの見過ぎちがうか。」

と、進路の相談まである。担任離れたニュートラルな立場の先生には打ち明け易らしい。

ちよつと気になる定期訪問者もいる。遊放時にはきちんとやってきて、女や若い先生相手にしょうもない雑談を吹っかけ、チャイムと共に憑きを落としたサッパリした顔になって教室へ帰っていく。

（姉ちゃんとの喧嘩がどうの、ベルシヤ猫のキャンパがどうしたの、だったら、教室で友だちとやった方がいいと思うがな。）

こちらの心中を感じするのか、ありがたいことに先生にはまず話しかけない。この手の訪問者はどうしたか先生や町村の素封家の娘や息子が多い。世間に溶けこめにくい性質をちゃんと引き継いでいる。

その閉鎖性を自分の中に編み入れて、見事に統一させている例外の医者の娘もいる。飼っているハムスターやリスやヤモリの日記で優しい感性と精緻な観察とでいつも国語教員をうならせている。その彼女が（宿題をやっつけない）怪しい理由を述べた。

第一回戦

「業平はうちの学校のそばを通過して河内の女に会いに行っこつてんど。その『伊勢』やっつてこんでどねんすんねん。アホンダラ。」

「センセ、親三頭子メ三頭、土手行くの、母さん、犬やばっかり思っつてましてん。それがゆうベタヌキとわかって卒倒してしもうて、医者呼ぶやらでえらい騒ぎ！」

彼女が国準を出ていってから、家が医者と気づいた先生、くそおーつ。

第二回戦

「百三十里、鉄幹追いかけていった晶子の情熱のどこやないけ。その解釈やっつてこんとおまえ、どんな女医になるつもりや、スカメ。」

「センセ、ドッグフードやる癖つけたから、毎晩、私の勉強部屋の窓のそこへ一家で並びにきますねん。そんなん気イ散って宿題も何も……」

第三回戦

「野生にえさやらの、おまえのポリチイちがうかつたんか。嘘つくんやったら古狸みたいにうまいことつけ、この山師め！」

「センセ、もうあきません。一家はこのごろ土手に並んで、私が風呂入つてるとご見学しよりますねん。」

「おまえの入浴をか。うえーっ、そんなもん見てもしゃないのにな。」

「センセ！
それで三日も風呂入ってへんから気持ち悪うて／＼。とても宿題どころやありませんねん、私らヤングレディーには死活問題なんですよ、センセ。」

とても入浴してないとは思えない肌艶の彼女は、さらさらした長髪をなびかせて廊下を闊歩していった。

ほどなく、彼女は卓抜のタヌキ一家観察記をまとめ、読ませにやっつてくるにちがいないと、先生は思った。
化かされまいぞ、化かされまいぞ、そう唱える先生の顔は、窓外の緑葉を映してしぜんとはころんでいた。



私は罿掛けが好きではない。私の場合、掛からなければ仕事にならないが、捕まったら先ず謝り、すぐ済むから辛抱してねとできるだけ穏やかに(狸撫で声で)話しかけてしまう。平均寿命が七、八十年の我々の一時間は、長くて数年の命の野生タヌキにとって、決して短くはないだろう。罿に一晩も閉じ込められたらえらいことだ。また、繁殖期や育児期であれば数時間でも、生涯における大切な時間を切り取られることになる。

罿の中でも、タヌキはその個性を見せてくれる。Bokudenは熟睡していた。ライトを照らしてもぐっすり眠っているの、残りの罿を見回ってから、作業にかかった。Lunaは、発情中の所為か気が立っており、罿の中で四肢を突っ張り、罿から出てもらうのに20分程かかった。Musashiは、殆ど暴れずスッと麻袋に入ってくれたが、一撃必殺、頭を押さえようとした私の左手に袋の中から噛付いた。麻酔のかかり方も千差万別で、FujituboやGaiaは、半時間程で覚め二本目の注射が必要だったのに対し、Kudonは1時間20分眠った。牛舎のすぐ裏で捕まったMusashiに至っては起きる様子が無く、そのまま麻袋に包んで牛舎の奥に置いておいたら、四時間程睡眠を取った後帰って行った。彼は途中何度も寝返りをうっており、麻酔で眠っていたのは初めだけだったと思う。捕まった時刻や見つかった時刻や入っていた時間などの要因もあるが、個性の違いは否定できない。実験室の動物達は、均一であることを前提とされ、何かの要因や効果などの検出を目的として研究される。野生動物は、個性をあるがまま発揮し、自分の生活を営み続ける。而してその研究者は翻弄され魅了される。

私が小学生の頃、「尊敬する歴史上の人物は？」の問いに、「人物とちゃうけど狼

王ロボ！」と答えていた。シートンの卑劣な罿(計略という意味でも)に捕まりながらも、孤高であり野生であり続けた彼の物語は、多分に私の価値観に影響を与えた。

(後日、宝塚ファミリーランドで開かれたシートン展にロボの毛皮が展示されたとき、面晤に伺った。大きかった。)

アメリカでコヨーテが括り罿に掛かって死んでいるのを目撃した。死因は犬歯が突き抜けるほど舌を噛んだところからの失血死の様だった。「野生！然らずんば死を！」でもなかろうが……。又ある日、私が仕掛けたテンの為の籠罿にアカリスが掛かって、外からテンに食われたらしく、下半身が無くなっていた。死体の中に入れてまま仕掛け直したら、翌日、テンが捕まった。我ながらえげつないと思った。私は誘引剤としてアニスを使っていたが、プロの中には捕殺個体から抽出した肛門腺分泌物やら発情雌の尿やら使う人もいると聞いた。やはり《罿=卑怯》という等式がちらつく。

アメリカではクロクマに罿を荒されたり持って行かれたりしたが、ここではアナグマに三度罿を壊された。私のフィールドで随一の力持ちと言え彼らだから、そうであると確信している。二重の落とし戸の先端が丸く曲げられ横倒しになって、もぬけの空だ。人力では直せなかった。私は只、感心するばかりだった。しかし、人間に罿を盗まれたとき、滅茶苦茶腹が立ち、「こらっ、名前と許可番号と連絡先書いてるのが読めんのか！このクソぼけ野郎！」と、つい叫んでしまった。

Daphne一家は、罿の仕掛を見破ったらしい。彼女の発信機が電池切れ近くになってきたので再捕獲を試みているが、一向に成功しない。踏板を避けて餌を取る。初めノネズミかと思い、紙コップに餌を入れておいたら、空のコップが罿の外で歯形だらけになって転がっていた。ねぐらのすぐ近くに置かれた罿は、彼らにとってみえみえのダサ～イものなんだろうか。

特集〈餌付け〉

＜「自然講座」発表原稿より＞

しつこいようですが「餌付け問題」

岸本 真弓

先日、東京都高尾自然科学博物館で「タヌキと人間生活の接点」という自然講座の講師をする機会を得ました。そこで私は大楠山のタヌキの調査結果を中心にお話したのですが、最後に餌付け問題について一言付け加えさせていただきました。餌付け問題については、本誌でも幾度か意見が掲載されてきましたが、私なりに整理してみたことをもう一度ここで述べたいと思います。

■ どうして餌付けをするのか

人がどうして餌付けをするかという事については、深刻な餌不足のため給餌をしなければその種の存続が危ぶまれるといった特殊な事情がある場合を除いて、非常に安易な考えから始まっているものが多いと考えられます。それは「かわいいから」とか「餌がなくて困っているんだらう」といった思いこみに代表されます。そしてその背景には「餌を与える事が動物愛護」であるとか「自然と触れ合う教育的なもの」といった社会通念があり、餌付けを容易に容認しています。また、わが国においては、特にサルによくみられるように観光のために野生動物を餌付けして商品化している場合もあります。

■ 餌付けの結果起こること

そのような餌付けの結果どのようなことが起きるのでしょうか。まず、最も顕著なのが増殖です。自然下で適正な数にコントロールされていたものが、豊富な餌が供給される事により、繁殖率が高まったり、死亡率が低下したりして数が増加します。そうするともう、もともとの自然下では収容できなくなります。そのことがさらに人為的な食物への依存度を高めさせたり、場合

によっては近隣の農作物への被害も引き起こします。また、生息密度の異常な高まりにより、行動範囲や社会構造、子供の分散といった動物本来の生態に影響を及ぼす事が考えられます。さらに特定の種のみを餌付けによって増殖させる事により生態系そのものが崩れてしまうおそれがあります。

人間との関わり方に関しても、その距離が縮まる事によって病気の伝搬が起こる可能性が高まります。それは野生動物から人間あるいはコンパニオンアニマル（いわゆるペット）へ、その逆の人間あるいはコンパニオンアニマルから野生動物へといった両方向に起こり得ます。交通事故はもちろん、人為的食物への嗜好性の高まりによる農作物被害もさらに引き起こされるでしょう。

■ 餌付けの盲点

餌付けの問題点というのは、前述のような野生動物に対する影響だけではありません。私たちの思考という目に見えないところにも影を落とします。つまり、餌付けはそこにある自然下ではもはや生息し得なくなった動物を存続させる事を可能にし、これによってその環境が今なお豊かであるような錯覚を与え、本来とるべき保護策を見失わせるといった危険性があるのです。これは例えば、大気汚染に抵抗力のある樹木を植栽する行為と本質的に相通じるものがあると思われれます。

■ 今後とるべき方策

このように個体の愛護は決して自然保護ではないという事、野生動物は私物や飼育動物でないという事をしっかりと頭にいれることがまず第一でしょう。そして具体的には、意識的な餌付けや生ゴミの不始末などによる無意識的な餌付けを行わないようにしなければならぬでしょう。もし今行っているならば、それを急にやめる事はまた動物側に混乱を生じさせますから、徐々にやめていったほうが良いでしょう。もちろん、根本的な対策として生息環境の保全、

改善に努めていく事が必要であることは言うまでもありません。

私はタヌキが好きです。1頭でも多くのタヌキが生きていてほしいと思っています。でもそれは山の中で生きていてほしいと思っています。残飯を漁り、人の手からパンをもらうような生き方はしてほしくないと思っています。冷たい言い方かもしれませんが、餌付けによってしか生きていけないタヌキは自然に消滅していくべき運命なのだと思います。

最近の環境ブーム、アウトドアブームで私たちの自然に対する欲求は強くなり、ちょっと欲張りになりすぎているのではないかと思います。野生動物には野生動物の生活がある事を認識し、そういう野生動物に対して敬いの気持ちを持ち、一歩引いた真摯な態度で接していく事が必要だと思います。

(Field Noteより許可転載)



DOG FOODは安全・完全栄養食か？
相良 順子

Dog foodって何故腐らないのだろう？
そんな疑問を持ったのは15年間、病気と戦った愛犬を亡くしてからでした。総合栄養食であるdog foodを、ひたすら与え続けていましたが、被毛の変色・脱毛・体中の湿疹・耳の中の汚れ、悪臭・目脂・心臓病・肝臓病・腎臓病・結石・etc。病気のオンパレードでした。動物病院へ通う日々。大金に羽根が生えて飛んで行きました。動物病院は、いつ行っても満員。同じ様な症状の犬達が、悲しそうに待っていました。そし

て散歩に出ると、行き交う犬達も又、異常な症状がでていのに何度も会いました。"おかしいなあ?"と思い始め、それからdog foodについて調べてみることにしました。

人間が食べる物の安全性を確保する為に、食品衛生法という法律ができている他、人間の食料になる牛、豚、鶏の餌に関しては、飼料安全法という法律があります。あくまで人間の安全性を考えて、不完全ながら最低限の法規制があるわけです。ところが、イヌ、ネコについては人間の食料になっていないので法律による基準がありません。管轄は農林水産省です。問い合わせしてみると、日本のペットフードに関しては、法的規制がないので監視されていないとのこと、あくまで各メーカーの自主管理になっているとのことでした。全ての病気がdog foodのせいとは言い切れませんが、dog foodが開発(?)されてから約30数年、以前では考えられなかった病気が、犬達を犯している事実は見過ごせません。

Dog foodの原材料を調べてみると、次の物がフード類に大変よく使われている非常に有害な物です。化学薬品、合成添加物、動物性脂肪、肉類副産物、ミート・ミール、レバー、大豆粉、塩、砂糖、成犬の場合23%以上の蛋白質、11%以上の脂肪、ペニシリン、・・・etc。動物性脂肪、合成ビタミンを使ったドライフードには必ず酸化防止剤等の毒性の強い化学薬品の添加が必要なのです。特に輸入ドライフードは、BHT、BHA(ラットのテストで発ガン性、催奇性(無眼症)が確認されている)を含有しています。現実には日本でもペットの産んだ子犬達の中にも無眼症がでています。エトキシキン=ゴムの固定剤として開発され、除草剤、殺虫剤、防腐剤として使用(アメリカがベトナム戦争で使った「枯葉剤」の様な毒性の高い化学物質)もあります。そしてアメリカではペットフードをつまみ食した11カ月の白人の赤ちゃんが、含まれて

いたベニシリンでショック死するという事件もありました。

アメリカやドイツでは、ペットではなくライフパートナー、コンパニオンドッグとして、今では日々フードについて研究がなされ、より自然の物へと移行しています。腐るフード、カビが生えたり、虫がわいたりするフード、本当はそんなフードが安全と言えるのではないのでしょうか。

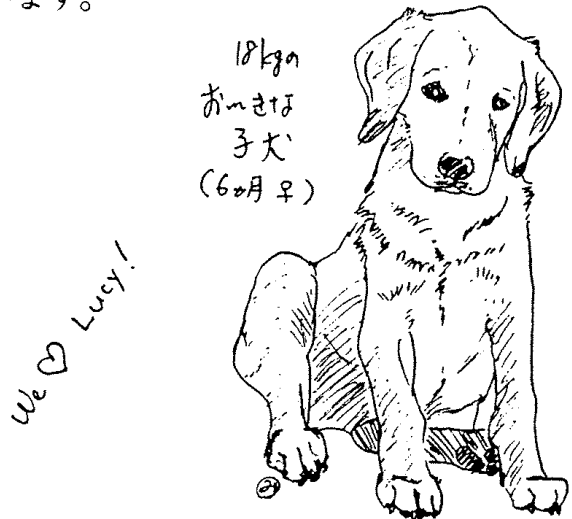
私は現在、ラブラドル・レトリバーの母娘を二頭飼っています。あえて交配相手には、ナチュラルフード(自然食フード)のみで飼育されている牡を選び、今日までずっと母娘ともナチュラルフードで育ち、健康です。ナチュラルフードが絶対とはいきませんが、dog foodを食べさせるのならナチュラルフードがまだ大丈夫かな? という気持ちです。尚、dog foodを全く受け付けない犬には、米(タイ米)、野菜(みじん切り)、魚(青魚はNO.)などをおじや風に味を付けずに与えると良いでしょう。

犬の健康を保つには、給餌前には散歩などの軽い運動をさせて、内臓の活性化をはかり排出を済ませ、味の付いたもの、特に甘いものは与えない。「ほんの一口」「ほんの少々」と言い訳する方もいますが、その少しが味を覚えさせてしまうことになります。また、普通のdog foodは大半が、短時間で焼き上げられている為、空気が多く含まれています。だからフードにお湯を加えてつぶして空気を少しでも取り除いてやることによって、鼓腸症を防ぐことができます。こんな経験はありませんか? 同じ内容量なのに一方のフードは少なく見え、もう一方は多く見える。これは錯覚ではなく、分量の多く見える方は、より短時間で焼き上げられたものであり、その分、空気が抜けていないフードという訳です。

そして最後に、山から降りてきたタヌキを餌付けしている人々がいます。その中にdog foodも含まれていましたが、タヌキもイヌ科なのだから、dog foodを食べ続け

ば、今犬達が犯されている病気になるはずですよ。いえ、もうなっているかも……。イヌでもタヌキでもただ可愛いからと何でもかんでも与えるのって本当に恐いですね。

今の私には、二頭の愛犬にオヤツを与えて下さる方に対して、はっきりと「NO!」と言える勇気と知識があることを自負しています。



餌付けについて考えてみよう!!

福江佑子

「庭にタヌキが餌を食べにやってくるようになったのよ。それが子どもなんか連れてくるようになって。それがまたかわいいのよね。」……よくあるできごとである。また時々、「誰だれさんちに出てくるタヌキ」の写真などが、新聞や雑誌の紙面に載ることがある。先日のあるビデオバラエティ番組で、一目で脱毛して病気のタヌキだとわかる映像がながれたが、なぜだかやはりカワイイというコメントで終わってしまった。このような写真の掲載や番組はどういう意図なのだろうか。かわいいタヌキ、平和なニッポンをアピールすることにあるのだろうか。それとも少し大げさな言い方になるが、昔は神であり、化け物であった野生動物が、とうとう人間様から餌をもらうほどに成り下がったことを憂いているのだろうか。

いろいろな野生動物で餌付けが行われてい

る。お手軽に家庭の庭でも楽しめる野鳥やタヌキやアナグマ、スケールの大きなものとしてはハクチョウだとか出水のツルの例などがある。知人から聞いた話だが、クマを餌付けしている人もいるらしく、なんと餌付け場に7、8頭ものクマが現われるらしい。

”餌付けは野生動物たちにとって、果たして良いことなのだろうか。”このような葛藤とともに、研究のためだという言い訳を用意しながら、私も餌付けを行ってきたひとりである。餌付けにはプラス面、マイナス面あると思う。野生動物を調査、研究している特殊な人を除いた一般の人々にとって、餌付けという手段は、野生動物に接する最大の機会であり、野生動物を理解する一歩となるかもしれない。また野生動物にとっては一時的な餌資源の確保という意味ではプラスになるだろう。しかし長い目でみると餌依存の高い野生動物を作り出し、栄養過多や多量の塩分摂取による疾病、また高密度状態になるために伝染病の伝染率は高くなる、更に餌場までやって来るまでに交通事故に遭ったりということを引き起こす。クマなどではヒトを警戒しなくなり、人身事故も増え、即、有害駆除となってしまう。

このように考えてみると、研究の為だと言いながら餌付けを行なう私をはじめとして、餌付けのプラス面というのは、ヒト側の論理であり、決して野生動物からの論理ではない。それでも餌付けを行なうならば、マイナス面を承知した上で、そのマイナスが最小限になるように考えていかなければならない。餌付けを行なっている人は、少なくとも動物好きの人だと思う。だからこそ野生動物をイヌやネコのようなペットと同一視してしまう傾向があるかもしれない。今後はもっと野生動物に対するつきあい方を講じていく必要があるだろう。次回のタヌキクラブの総会の時にでも論点として、話し合ってもいいかもしれませんね。



野生動物への餌付け

廣谷聡子

私たちは、「食べ物の恨みは怖い」という言葉をよく使います。これは、食べ物が私たちの生活の中に大きな位置を占めているからだと言えるでしょう。私たちは食べ物を賞品として競争したり、賭けたりすることがあります。賞品である食べ物を別の方法を使って手に入れることが可能であるにもかかわらず、私たちはその食べ物を手に入れようと必死になります。

同じようなことが動物においてもいえると思います。動物園のサルたちは、観客が与える餌（お菓子や果物）を手に入れるために様々な行動を示します。拍手をしたり、お辞儀をしたり、手を降ったり、ジーっとみたり…。個体ごとに物乞い行動の中身は違いますが、確実に観客の目を引き、餌を貰うことができています。しかし、動物園の動物たちに餌を与えることは禁止されています。飼育係が栄養を考えて餌を与えているからです。それでも、動物は餌を欲しがり、人間はあげてしまいます。（結果、病気になる動物もいます。）つまり、動物園の動物たちにとっても、食べるということは生きる上で重要なことなのです。

野生動物においては、餌付けをすることによって動物が集まってくるために、観察がしやすく、観光のひとつとなっています。現在では各地の公園において観光目的の餌付けが行なわれています。しかし、野生で生きている動物に対して、人間が餌を与えるということは、自然の調和を壊すことに

つながるでしょう。餌を与えて栄養状態がよくなると、個体数は一気に増加します。今まで、食う食われるの関係が成り立っていた場所に人間の手が加わることによって一方の側が強くなり、関係が崩れるのです。野生動物は、わざわざ餌をとらなくても容易に食べることができるので、餌付け餌に依存するようになります。さらに、野生動物が人家に近付くと、事故が起きやすくなったり、農作物に被害が出るようになります。このように、餌付けを行なうことによって、本来ならば遭遇しないような問題が次々に起きるようになるのです。そして、最悪の場合は、人間の行なう餌付けが、彼らの命さえも奪うことになりかねません。

私は、野生動物の餌付けは細心の注意を払って行なわれなければならないと思います。人間の気ままな餌付けによって、多くの野生動物が迷惑するかもしれないのです。古くから保たれていた自然のバランスを崩され、目に見えていないところで多大な影響を受けている動物たちのことをも考えて、餌付けを行なうべきだと思います。



====書籍紹介====

『ドードーを知っていますか』

文：ピーター・マイル ポール・ライス

¥1000

株式会社 ベネッセコーポレーション

ミドリが死んでしまった。サエキミドリではない。トキのミドリである。人間の年に換算すると80歳ぐらいだそうだが、果たして彼の精子は受精に成功したのだろうか？（この原稿を書いている途中で、ミドリの死を賭けた交尾も無駄になってしまったことがわかりました。）残り数羽になって、絶滅だの、人工繁殖などさわぎだし、

お金をかけだすのは、なんとも情けなく、ばからしい話である。果たしてトキの絶滅はわれわれに教訓を残すのだろうか。

さて本題に入るとして、本書は子ども向けに書かれた絵本で、非常に絵が美しく、見ているだけで楽しくなるのだが、中身はトキのように絶滅してしまった14種の動物たちの悲しい最期のお話である。ドードー（七面鳥のような鳥です）をはじめ、リヨコウバト、フクロオオカミなどが紹介されており、絶滅の原因が私たちであり、何度も同じ過ちを冒し続けていることを教えてくれる。また数多くの生物を絶滅にいたらしめたのがヒトならば、現存する生物の存否の鍵もヒトがにぎっているのだということを考えさせられた。

本書「ドードー」が目についたのは以前 ECOLOGYの本で「ドードー」という名前を見たからだった。それによれば、モーリシヤス諸島の *Calvaria major* という木は過去300年も新参個体がない。それはなぜかということ、種子分散者としてはたらいっていたドードーが300年前に絶滅してしまっているからだという。つまり *Calvaria major* は、かろうじて個体維持はしているものの、あとはドードーを追って絶滅を待つ状態なのだ。このように複雑にからみあって生物は存在しているため、たとえ1種の絶滅でも他の生物に与える影響は計り知れない。

蛇足1；著者を見て、“あれっ”と思った人もいるだろうが、あの南仏プロヴァンスの12か月のピーター・マイル氏である。かつては子ども向けの絵本も書いていたのですね。

蛇足2；残念なことは、学名がカタカナで書かれていること。おそらく日本語訳の段階でカタカナになったと思われるが、せっかく学名まで書かれているのだから、正確にイタリックでも表示して欲しかったと思います。

<文責；ふくえゆうこ>

ある冬の朝、長野県の高い高い山の上の岩の下の巣穴の中で、タヌキのケンジは、まどろんでいました。

昨日は、吹雪の中、一晩中、餌を探して歩き回ったなあ。きょうは、晴れそうだけど、一日中この巣穴で寝ていよう。

おやじやおふくろと別れてから、もうそろそろ半年。弟のマサカズとはずっと一緒にここで生活してきたのに、あいつは我慢が足りず、とうとう2週間前にもっと暮らしやすい所に行くんだといって5kmも離れたふもとの町へ下りていっちゃった。風の便りだと、気に入った娘っ子と出会ったらしい。あっちはタヌキ仲間も多いからなあ。交通事故に遭わなきゃいいが。

おいらは、まだしばらくこの山の上でがんばろう。ここは寒いし餌も少なし、タヌキ仲間も少ないけれど、住んでみればけっこう快適だ。ほかのタヌキが使っていない快適な巣穴もいくつか見つけたし、あとは少ない仲間の中から、うまく娘っ子を見つけるだけだ。

この巣穴だってけっこう快適だ。ここは、アナグマのキョウジさん達一族の作った巣穴だってことは知ってるけど、冬の間は、キョウジさん達は、あっちのフクロウ山の尾根の巣穴を使っているらしい。あのひとは山小屋のゴミ捨て場で出会うといつも怒って怖いけど、冬の間は、巣穴の前でのんびりひなたぼっこなんぞをしているくらいで、めったに巣穴から離れないから、安心だ。

おや、キツネのアキコさんだ。巣穴の様子をうかがいに来たようだ。いまは、おいらが使ってるんですよ。ため糞の表札も出しているじゃないですか。おとといは、テンのヤシチさんも巣穴の近くにやってきていた。

この辺で出会うアナグマ、キツネ、テンさん達はみんなおいらと同じような首輪をつけてる。みんな、あのトリガラ目当てで箱わなの中に入ったんだね。

おや、なんだかうるさい音がするぞ。スノーモビルとかいうやつが近づいて来るようだ。おいらたちに首輪をつけた変なやつが乗っている。雪の上に小さなテントを張っているぞ。首輪をつけられてから、車や人がおいらの回りをうろうろすることが多くなったなあ。

どうやら、今日一日おいらを追いかけるつもりだな。おあいにく様。おいらは、明日の夜まで巣穴の中で寝てるつもりさ。

今日は晴れそうだから、夜はマイナス20度以下になるぞ。まあ、がんばってください。きみには、首輪をつけられるわ、入れ墨を入れられるわで、さんざんなことをされたけど、こっちも箱わなの中の餌だけを何度も失敬しているからね。

それに、今はどんな山奥へ行こうと、きみたち人間と無関係に生きることはできないからね。そういえば、平成狸ポンポコなんて映画もあったね。おふくろから別れてうろうろしているときに、町の仲間から聞いたよ。本物のおいらたちは、化けることはできないけど、けっこうしたたかに生きているよ。

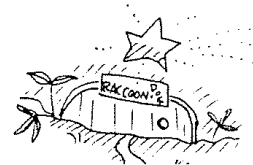
でも、したたかさだけでは切り抜けられない状況ってのもあるんだよ。

その辺のことは、もうすこしきみたち人間に考えてもらわなくちゃいけないね。おいらたちの生きる場所を変えているのはきみたちだからね。

首輪をつけられたからって、いうわけじゃないけどね。

といっても、おいらの言うことがわかるわけないか。

さて、寝よ。寝よっと。



: こんなタヌキたちの独り言が聞けたらいいよなといつも思っています。

1995.7.16-21. 10th International Conference on Bear Research and Management, Univ. of Alaska, Fairbanks, AK. (Harry Reynolds, 10th IBA Conf. Co-Chair, AK Dept. of Fish & Game, 1300 College Rd., Fairbanks, AK 99701-1599; Tel 907-459-7238; Fax 907-451-9723.まで。)

1995.8.5-6. 第2回タヌキクラブ総会。詳細が決まり次第、会員に案内を送付します。

1995.8.8-10. Repellents in Wildlife Management Symposium, Sheraton Hotel, Denver Tech Center, Denver, CO (Colorado State Univ., Office of Conf. Service, Fort Collins, CO 80523.)

1995.8.12-16. 2nd International Martes Symposium, Univ. Alberta, Edmonton, Alberta, Canada. (Gilbert Proulx, Alpha Wildlife Research and Management Ltd., 9 Garnet Crescent, Sherwood Park, Alberta, Canada T8A 2R7; Tel 403-464-5228.)

1995.9.12-17. The Wildlife Society 2nd Annual Conference, Portland, OR. (5410 Grosvenor Lane, Bethesda, MD 20814-2197. Tel 301-897-9770; Fax 301-530-2471.)

1995.9.28-10.1. 日本哺乳類学会1995年度大会。京都大学総合人間学部(旧教養部) D・E号館。(京都市左京区吉田二本松町) 606-01京都大学理学部動物学教室動物生態学研究室日本哺乳類学会1995年度大会事務局 村上 興正 Tel 075-753-4079。

編集便り

発信機をつけたタヌキが一頭死に
ました。野犬(又は救済飼育)にせられ
たらしい YUKO さんとここの前の
豪雨で溺死した1匹の個体があった
そうです。コンクリートの排水溝は1匹は
一時の雨が集中して逃げ遅れることも
あるらしいので、これも人災かなあ。(2)

寄贈

『いまどきの町だぬき』多摩丘陵野外博物館 たぬき実行委員会 (B5判 40pp. ¥1000)

どうもありがとうございました。

加藤 輝治(KATO, TERUJI)=日本ペンクラブ会員。日本動物愛護会会員。「海を渡ったタヌキたち」他短・長編が50編以上。

佐伯 緑(SAEKI, MIDORI)=オックスフォード大学 野生生物保護研究ユニット所属。千葉県陸沢町を中心に野生タヌキの研究とイヌとの散歩に明け暮れる。

岸本 真弓(KISHIMOTO, MAYUMI)=(株)野生動物保護管理事務所(WMO) 研究員。獣医師。神奈川県大楠山で野生タヌキの研究に従事する。

相良 順子(SAGARA, JUNKO)=愛犬家の中の愛犬家。「味噌・醤油は切らしても犬だけは切らしたことがない」と豪語(?)する。

福江 佑子(FUKUE, YUKO)=東京農工大学一般教養・生物・小原研究室・D3。埼玉県狭山湖周辺において野生タヌキの研究に携わる。

廣谷 聡子(HIROTANI, SATOKO)=早稲田大学人間科学部四年。(なぜなぜ大魔王)。上野動物園でニホンザルの行動を観察中。

山本 祐治(YUJI, YAMAMOTO)=(財)平岡環境科学研究所研究員。川崎市内及び長野県入笠山において野生タヌキの研究を続ける。

雑
狸
歌

磯室遺草 (足立正肇男遺稿) 拔萃

さよ更てうつや狸の腹鼓つゝみなき身のすさびなるらん
味酒にいまこそ煮へれいざ狸はらつとみうてわれはうたはむ
たぬきこそわれとあれけめまたもよに狸とこそは我もうまれめ
狸の豆腐買ひにゆくところ
うたげする枯野の夜半の風寒み落葉をかへにいざかへてまし
狸の鎧をき薙刀とりてすゝみゆくかたに
せめつとみ音ぞ聞ゆる我もいざ君があだ野にうちすゝまし

タヌキクラブ事務局
〒299-44 千葉県長生郡陸沢町
寺崎酪農団地鶴沢牧場方
TEL&FAX 0475-44-1691
郵便振替口座 00980-7-251165